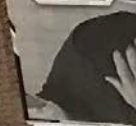


下手すると、死にます

警告



埼玉県八王子市で由田製薬が、埼玉県内各地から集まった...

血液サラサラの薬 抗がん剤 心疾患 高血圧 糖尿病 リウマチ 人工透析 膠原病

飲んでいる人、これを コロナワクチンを まだ打たない

「持病あり」優先の矛盾

コロナワクチンに関する情報を調査しているナカムラクリニック院長(神戸市)の中村篤史氏が語る。「今回のワクチンは緊急承認されたため、現在も各メーカーでは油断が絶えず、言い方を変えてみると世界規模の人体実験中なんです。世界でワクチン接種後に亡くなった人の多くは、基礎疾患のある高齢者で重症から薬を服用している人です。」

さらにコロナのワクチンは、既存の薬との組み合わせに対する安全性のチェックがされています。これは通常のワクチンならあり得ないことです。その点からも、様々な薬を飲んでいる高齢者や持病のある方は、避けてワクチン打つ必要はないと考えています。しかし、厚労省は「コロナにかかったときに重症化しやすい高齢者や基礎疾患のある人は優先的に接種することを推奨し

明らかにされていませんが、これも血栓が関係している可能性は高い。このことから心臓に持病があり、血液サラサラの薬を飲んでいる人にも、また十分なデータが揃っていないこの時点で、ワクチン打つのは、危険な行為だと考えています。」

ンデミックを終わらせるためには、ワクチンは必要不可欠だ。しかし、今回世界中で使用されているmRNAワクチン(ファイザー、モデルナ)やウイルスベクターワクチン(アストラゼネカ)は、まったく新しいタイプのもので、接種後に何が起るのか、いまの段階では誰にもわからない。

ている。その一方で、ワクチン接種の要注意事項として「心臓血管系疾患、腎臓疾患、肝臓疾患、血液疾患、免疫不全」などを挙げています。「政府は持病があり、薬を飲んでいる人に注意を促しながら、そういう人はワクチンは積極的に打つ方がいいとしている。これは明らかに矛盾しています。何か問題が起きたときの逃げ道として、こうした注意書きを送っているのではないのでしょうか。」(前出・井上氏)

現在、日本ではファイザーのワクチンが使われているが、5月にはアストラゼネカのものも1億2000万回分、供給される予定だ。

「コロナワクチン幻想を切る」の著者で、大阪府立大学名誉教授の井上正康氏が語る。「私は血栓症こそがコロナの本質だと考えています。コロナに感染した際に、息苦しいというのは、肺の血管が詰まることで起きており、高齢者の多くはこのような症状で亡くなっているのです。」

「日本では医療関係者へのファイザー製のワクチン接種が進んでいますが、すでに6人が亡くなり、うち4人が脳卒中(脑梗塞、脳出血)でした。ワクチンとの因果関係は

急いではいけない

新型コロナウイルスのワクチンを接種すると「血栓(血の塊)ができる。4月12日から、いよいよ65歳以上の高齢者への接種が始まった。ところが、同時に気になるニュースも入ってきた。4月7日、ヨーロッパ医薬品庁は「アストラゼネカ製のワクチン接種後に起きている異常な血栓は、副反応としてリストされるべきだ」と表明した。実際、ドイツでは同ワクチンを接種した31人に脳血栓(脳梗塞)の症状が出て、そのうち9人が死亡。こうした事態を受け、欧州では同ワクチンの接種を止める動きが広がっている。

「コロナワクチン幻想を切る」の著者で、大阪府立大学名誉教授の井上正康氏が語る。「私は血栓症こそがコロナの本質だと考えています。コロナに感染した際に、息苦しいというのは、肺の血管が詰まることで起きており、高齢者の多くはこのような症状で亡くなっているのです。」

「日本では医療関係者へのファイザー製のワクチン接種が進んでいますが、すでに6人が亡くなり、うち4人が脳卒中(脑梗塞、脳出血)でした。ワクチンとの因果関係は

基礎疾患がある高齢者ほど、早くワクチンを接種したいと願う一方で、このワクチンは薬との飲み合わせなど、まだまだ明らかにできていないことが多い。本当に急いで打つ必要はあるのか――。

この「薬」を飲んでいる人、この「持病」の人は
死にます
コロナワクチンをまた打たないほうがいい

でも自己責任となる。
では具体的にどんな薬を飲んでいる人、どんな持病がある人は、コロナのワクチンを打つのを避けるべきなのか。
まず持病については、冒頭にも紹介した血栓に関連する病気を持っている人だ。
「高齢者の多くが高血圧や糖尿病を抱えています。こうした人は血管が固くなる動脈硬化が進行しているため、ワクチンによって血栓ができた際に、脳卒中や心筋梗塞を引き起こす危険性があります」(前出・高橋氏)

糖尿病が悪化すれば、腎臓に負担がかかるため人工透析を受けざるを得なくなる。現在全国には33万人の透析患者が存在するが、海外では透析患者にワクチンを接種して、死亡した報告も上がっている。
「海外でのさまざまな重篤な事例がSNSに投稿されています。例えばイ

スラエルでは、透析で入院中の患者に病院側がよかれと思いい、本人の意思確認なしにワクチンを接種したところ、2回目の接種から10日間嘔吐が続き、死亡しました。こういう事例はいずれ日本でも出てくると思います」(前出・中村氏)

接種現場ではわからない

病としては喘息が挙げられる。実際、日本でも喘息持ちの医療従事者(30代の女性)がワクチン接種後、咳がひどくなり、発熱と呼吸困難を起こして救急処置を受けている。仮にワクチンによりコロナのリスクが減ったとしても、持病が悪化すれば元も子もない。

一方で薬とワクチンの相互作用が、最も懸念されるのが抗がん剤だ。「抗がん剤を使用しているが、本当にワクチンを打っても大丈夫なのか」と心配する声は多い。そういった声に対して、日本痛学会は、「基本は接種を推奨する」としている。しかし、一方で宮城県立がんセンターでは「問題ない」としつつ、接種する時期については、受けている治療によって異なるので相談ください」と慎重な姿勢を示し

なりません。下手すればそれで命を落としかねません」
免疫系の病気として知られるリウマチや膠原病も同様だ。
「特に免疫抑制薬(メトトレキサートやレフルノミドなど)を使用している人は安易にワクチンを打たないほうがいい」と、前出の中村氏は語る。

前出の高橋氏は、自身の見解をこう述べる。「抗がん剤を使用すると全身の免疫機能が著しく低下します。今回のワクチンは、ウイルスを直接体内に入れて抗体を作るわけではないですが、コロナの遺伝子を入れるわけですから、免疫系統にダメージを与える可能性は十分あります。抗がん剤を使用している人は体力も落ちているので、発熱や倦怠感といった副反応も相違なく

などを服用している人はさらに注意が必要となる。アナフィラキシーショックが起きた際の治療では、アドレナリンを筋肉注射することが最も重要だが、このβブロッカーを内服していると、アドレナリンだけを注射しても効果が認められないことがある。その場合、グルカゴンという別の薬を投与しなければならぬが、接種する現場の医師がそこまで把握しているとは考えにくい。

この薬は免疫力を抑えてしまうので、服用中は風邪など感染症にかかりやすくなります。そういう状態でワクチンを打つたら、身体全体の状態が余計に悪くなるリスクがあります」
コロナのワクチンを打った際に最も注意すべき副反応が、急激な血圧低下や失神などをもたらす「アナフィラキシーショック」だ。接種後、短時間で命を落とすケースもある。高血圧や不整脈があり、心拍数を抑える薬であるβブロッカー(メインターートやアーチスト

持病がある高齢者が、いち早くワクチンを打って自由になりたい、この閉塞感から早く脱出した、と思うのは当然のことだ。
だがワクチンの「打ち損」「死に損」になつては元も子もない。それならば、持病のある人や投薬中の人は、情報がもう少し集まるまで様子を見たほうがいい。間違っても、焦ってワクチンを打つのは避けるべきだ。

AIが完全判定

世田谷区で5